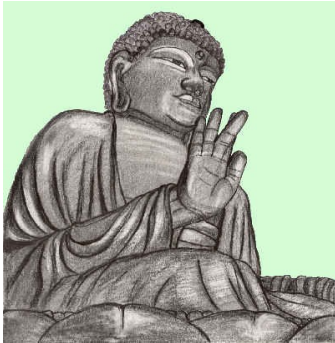


はんない

～奈良：東大寺編～



薬師寺の次に訪れるのは、誰もが知っている「奈良の大仏さま」で知られる東大寺。「大仏さま」こと、盧舎那仏（るしゃなぶつ）は、8世紀に聖武天皇が国家鎮護の願いを込めて、その造立を命じました。

その東大寺の正門となるのが、南大門。豪壮な門で高さ 25m、でも実は、この門、鎌倉時代の再建なんです。1180（治承 4）年 12 月 8 日の夜、源氏と奈良の寺院が結びつくことを恐れた平重衡が、東大寺・興福寺などの寺院を焼き討ちしてしまったんです。この時、東大寺大仏殿の両側に建っていた 90m の七重塔も冬の夜空に青緑色の炎を出しながら崩れ落ちていったと言います。この南都の炎上を目の当たりにしたのが興福寺の仏師、運慶でした。平安時代は、京都仏師に押され奈良仏師への仏像依頼は多くありませんでした。京都仏師は、平等院鳳凰堂の阿弥陀如来像に象徴されるように、穏やかで丸みのある貴族好みの仏像をつくったからです。ところが、武士の世となり、仏像の表情にも力強さや厳しさが求められるようになると、



運慶のもとにも仏像の注文がくるようになりました。源平の合戦に源氏が勝利すると、頼朝は焼失した東大寺の再建を計画します。そして、運慶ら慶派が、南大門の両脇に置かれる、金剛力士像の制作に取りかかることになります。しかし、期限は約 2 ヶ月。そこで運慶は、京都仏師より引き継いだ寄木造りの工法を取り入れます（1988 年に行われた解体修理で、仁王像の部材が長さ約 7m のものから 2cm のものまで約 3,000 のパーツから成っていたことが判明した）。

金剛力士は、仏法に害を及ぼすものを最強の武器である金剛棒で撃退する守護神。高さは 8.4m、身体全体に浮き出る筋肉、厚い胸板、腕には血管さえリアルに表現されています。



また、下から見上げる為、その迫力を失わないように、頭が大きめにつくられています。門の西側にそびえるのが口を開けた「阿形」、東側には口を閉じた「吽形」。「あ」と「ん」は始めから終わりまでを表す音。仏教では、その間に森羅万象全てのことが含まれると考えられています。ところで、南大門の真ん中の敷居の上で正面向きに立って、両脇を見ると、金剛力士像と目が合うように作られているんだそうです。是非、仁王様とにらめっこしてみてください。また、南大門の柱には、戦国時代に松永久秀が放った弾痕が複数残っているそうです。

南大門をくぐりまっすぐ進んでいくと出てくるのが、高さ 49.1m、幅 57.5m の大仏殿。こちらもやっぱり再建で、今、目にしているのは江戸時代に將軍綱吉の働きかけによってできた建物で、創建当時は幅が 82m もあったと言われます。そんな中で、奈良時代のままの姿を残しているのが、大仏殿の正面に建つ金銅製の燈籠、“

金銅八角燈籠”。この燈籠には、“音上菩薩”と呼ばれる楽器を奏でる天女が彫られていて、穏やかで優しげなお顔がとても印象的です。幾度もの兵火を乗り越えて、この燈籠が当時のまま残っているというのは、奇跡と言うしかありません。楽器を奏でる天女の向こうには、奈良の大仏様が座っておられ、天女が奏でる音楽に、大仏様はずっと昔から癒され続けていたのかもしれませんが。でも当然、こちらの大仏様も創建当時のものではなく、頭部は江戸時代、昔の姿をそのままに残しているのは、両足と蓮弁の一部だけになっています。

しかし、高さ約 15m のこの大きな仏様の存在感には、誰もが圧倒されます。盧舎那仏は、大乘仏教における仏様の一つで、宇宙の光（真理）をすべての人に照らして、悟りに導いてくれます。より多くの人を救済する為に大きくつくられているんですね。ちなみに、大仏様の完成には、9年の歳月が費やされています。昔、中学校の数学の先生から、「奈良の大仏さまが東京まで歩いたら、どれくらいで東京に着けるのか」という問題を出されたことがありました。計算によると、大仏様が立ち上がったら、身長約 30m で、ウルトラマンよりも 10m 低く、身長 170cm の人の歩く速度が時速 5km だとすれば、人の身長約 17.6 倍もある大仏様の歩行速度は時速約 88km になり、奈良～東京間は約 555km なので、約 6 時間半という数値が出てきます。一方、ウルトラマンの走行速度は時速 400km。このため、大仏さまよりも、もっと早く東京に行くことができるらしいです。



ところで、大仏殿には、30cm×37cm の大きさの穴のあいた柱があります。この穴の大きさは、大仏様の鼻の穴と同じと言われています。この穴をくぐり抜けと、ご利益があるということで、この“柱くぐり”が昨今観光客に大人気です。しかし、そもそも、この柱の穴。いったい何のために開けられたと思いますか。ご利益のために開けられたものではなく、この柱の方角が鬼門に当たるため、柱に穴を開けて、邪気が穴を通して抜け出すようにしたらしいです。

大仏殿を出て東に歩みを進めると、旧暦の二月に「お水取り」が行われる二月堂があり、そしてさらに、その東隣には、東大寺最古の建築物である法華堂があります。三月になると、法華経を講じる法華会が行われることに由来し



ていますが、この法華堂、「天平物の宝石箱」と呼ばれることがあります。法華堂の中央に安置されている本尊が、像高 3.6m の「不空羂索（ふくうけんじやく）観音像」です。この観音様は、多くの悩める人を救う為に異様な形をしています。正面の顔をよく見ると、額の中央にもう一つの眼「天眼」があります。眼が三つ、手が八本で、「三目八臂（さんもくはっぴ）」と呼ばれます。また、手にもつ羂索も、投げると綱と釣り糸となって悩み苦しむ衆生をもれなく救い上げる法具です。この観音様をつくったのが、聖武天皇の妻、光明皇后です。造立主の名の通り、この観音様も「光づくし」です。身体全体や光背は、つくられた当時、黄金に輝いていたことが想像されます。天井には八花の形をした鏡、天蓋が取り付けられ、反射板の役割を果たしています。また、頭部には、銀線で編まれた真珠、水晶、翡翠、琥珀など約 25,000 個の宝石の冠をいだいています。この冠には、48 本の光の筋を発する光条がデザインされています。光は合掌し手に挟まれた宝珠からも、強い光となって放射されるように設計されています。この仏像が造立されるきっかけとなったのが、740（天平 12）

年の藤原広嗣の乱です。甥にあたる広嗣が起こした反乱によって、罪もなく亡くなった人々の冥福を祈る為、光明皇后が仏像造立を思い立ったと言われます。盧舎那仏をつくった聖武天皇、またその妻で不空羂索観音像をつくった光明皇后。二人の仏国土建設への思いが、今でも強く感じられます。

この後、芝生に覆われたなだらかな円い丘が三つ重なる若草山（三つの笠のようにも見えることから別名「三笠山」）。その形から「どら焼き」の登録商標にもなっている）を左に見ながら、藤原氏の氏神である「春日大社」をめざします。若草山では、毎年 1 月に山焼きが行われます。山頂にある古墳の主の靈魂の供養のために行われるようになったと言われています。また、山内のあちこちで鹿を見ることができます。春日大社建立の際、常陸国の鹿嶋神宮から神様が白鹿にお乗りになって来られたことから、神鹿は神様のお供であり、神の使いとして大切に扱われるようになりました。故に、奈良の鹿は、まるでインドのヒンドゥー教の牛のように人々から丁重に扱われ、今、現在、奈良公園を中心とした地域に約 1300 頭の鹿が天然記念物として保護を受けながら生活しています。



ところで、この周辺には、刃物屋さんが多く見られます。実際、夕食で立ち寄り「神仙境」さんにも、包丁やハサミがお土産として売られています。平安時代に、興福寺（藤原氏の氏寺）の僧兵らが使用する刀剣の鍛造を開始したことが、それらの店の発祥の由来とされています。

